

最近、「博士の愛した数式」という映画が話題になっている。また、去年は英国で記憶喪失のピアニスト（後に演技だったことが明らかになったが）が発見されて病院に収容されていたことが話題になった。ここで紹介する話も記憶喪失に関する話である。

オリバー・サックスの「妻を帽子とまちがえた男」（高見・金沢訳、晶文社、1992年）に収録されている「ただよう船乗り」（1977年に書かれたもの）は、快活で人の良い49才の男性の実話である。サックス博士はこの男性ジミーを診察するうちに、いくつかのことに気づいた。まず、ジミーは数分前のことを全く憶えていない。そして、その間のことを思い出せないという感覚も持ち合わせていないらしい。彼はどうも1945年以降の記憶をすべて失っていて、いまだに1945年に生きてるように見える。とはいえ、慣れから来る親近感のようなものは持っていて、自分の過ごしているホームの自分の部屋、エレベーターや階段の位置は分かるようになったし、スタッフのうちの何人かを憶えていられるようになっている。スタッフの一人の看護婦は修道女だが、ジミーは気に入っているその修道女を高校時代の同級生だと思いこんでいて、サックスがシスターと呼ぶのを聞いて、「彼女がシスターになったなんてちっとも知らなかった。」と言って驚くのである。ジミーの履歴を調べるうちに、以下のことが分かった。彼は海軍の優秀な技官だったが、1965年に海軍を退職してから次第に高度のアルコール依存症になり、1971年に失明当識が高じて、アルコールによる脳症候群と診断されて病院に収容され、以後いくつかの施設を廻っていた。

サックスはジミーの状況を改善するために、いろいろなことを試みた。そのひとつはジミーに日記を書かせることだった。しかし、これは失敗に終わった。彼はしょっちゅう日記をなくしてしまうし、無理に書かせた日記に書くことは全く脈略がなく、自分が前日に書いたという記憶さえなかった。彼に「深み」などというものがあるとは思えなかった。ジミーは1945年という年に今でも生きている、いわば化石のような存在なのだろうか。サックスは、ジミーを理解するために発している質問によって、彼に自分を化石のような人間であると悟らせたとして、それが彼に絶望以外の何をもたらすというのだろうか、と自問した。

日記で失敗したサックスは、彼が今でもできるタイプをやらせてはどうかと思った。しかし、意味を考えることなく打ち込むタイプに彼はすぐに飽きて関心を示さなくなった。ゲームなども一旦習熟してしまうと興味を示さなくなる。サックスが修道女達に、「ジミーは魂を失ってしまったんでしょうか。」とふと漏らしたとき、あるシスターは真剣なまなざしでサックスを見つめて、「どうか聖堂に行ってジミーを見て下さい。そして、ご自分で判断なさってください。」と言った。サックスが聖堂で目にしたジミーは、彼がいつも見ているジミーとは別人のようだった。ジミーはすべてを集中させてミサに預かり、聖体拝領を受けていたのだ。そこには記憶喪失もコルサコフ症候群もなかった。シスターの言ったことは正しく、ジミーはここで魂を得ていたのだ。サックスは神経心理学者のルリ

アの言葉を思い出した。ルリアによれば、「人間は記憶だけでできているわけではありません。人間は感情、意志、感受性を持っており、倫理的な存在です。神経心理学は、それらについて語ることはできません。。。この領域においてこそあなたは彼の心に達し、彼を変えることができるかもしれないのです。」

それから9年の歳月が流れた。ジミーは神経心理学的には何も変わっていない。しかし、以前のように心乱れ、落ち着きなく、退屈して途方に暮れることはなくなった。宗教や芸術に接することによって彼は明らかに変わってきている。当初は一貫性のない支離滅裂な状態から果たして脱出することができるかどうか疑わしいと思われた。しかし、ジミーの例は、痴呆など、神経心理学的には救いようのない状態にあって重度の器質的障害をもっている場合でさえ、回復の可能性は残されているのだということを示している、とサックスは結論している。

追記：母がアルツハイマーで記憶を失ってきた頃から、「人間」とか「人格」は一体何から構成されているのか、人はどこまで記憶を失っていても元の人格を保っていられるのだろうか、ということを考えさせられました。オリバー・サックスの「ただよう船乗り」はそういう疑問に対して一つの解答を与えてくれているように思えて興味を持った次第です。